

## 諦めない



### 岡久陽子

京都工芸繊維大学大学戦略推進機構系グローバル  
エクセレンス  
[606-8585] 京都市左京区松ヶ崎橋上町  
助教, 博士(農学).  
専門は木質材料科学.  
okahisa@kit.ac.jp

[www.biobased.kit.ac.jp/](http://www.biobased.kit.ac.jp/)

京都工芸繊維大学に着任してから、ようやく2年が経とうとしているような新米の私ですが、博士取得からは10年が過ぎており、その間に経験した出産、今も絶賛継続中の育児といったライフイベントを中心に「先輩からのメッセージ」を送らせていただきたいと思います。

私は博士取得後、1年目はプロジェクト雇用のポストドクとして、2年目からは日本学術振興会のPD、海外特別研究員RPDとして、渡り鳥のように職場を転々としてきました。細々とでもこうして仕事を続けてこられたのは、人生の節目の際にいつも支えてくださった先生方や、家族の協力のお陰にほかなりませんが、それでも「もうだめだ、辞めよう」と諦めかけたことがありました。初めての出産、育児の際です。今となっては懐かしい思い出ですが、当時は本気で悩み、落ち込んだことも覚えています。以下、情けない経験談ですが皆さんの励みにしていただければ幸いです。

長女を妊娠したのは学振PDのとき、妊娠後期までは順調でとくに不安もありませんでした。ところがこの油断が悪かったのか8カ月を過ぎた頃、切迫早産と診断され救急車で運ばれるという事態に陥ってしまったのです。何とか早産は免れたものの、それからは胎児が成熟するまで絶対安静、24時間点滴につながれた入院生活。初めての出産で無事に生まれるか不安が募り、何もできないストレスも相まって心が折れる日々でした。このような状況を乗り越えての出産だったこともあり、無事に生まれてきてからも我が子が心配で心配で。「離れるなんてとんでもない、仕事に復帰なんて絶対無理!!」と本気で思いました。当初の予定では1年間育児休業した後に復帰することになっていたのですが、休業期間が終わる頃、当時の受け入れ教員の先生に、つらつらと弱気な言葉を並べ「今回の復帰は見送ります」と連絡してしまったのです。ところが先生からのご返信は「今のあなたに必要なのは、諦めないことです。一緒に続けられる道を探しましょう。」というものでした。驚きました。自分は「諦める」つもりだったのだと、あらためて気づかされました。その後、先生は本当に道を見つけてくださり、自宅近くの大学で、自身の研究テー

マをより発展していける別の先生を紹介してくださいました。最終的には、家族からの励ましもあり、産休からカウントすると1年9か月という予定外に長い休業期間を経て、心身ともに研究へ復帰するに至りました。もちろん復帰してからも、順調だったわけではありません。夏は手足口病、冬は胃腸炎とインフルエンザ、子供の病気のフルコース。夫の海外転勤もありました。簡単には何事も進みませんでしたが、それでもまた始めてみると研究は楽しく、不思議なもので、どんなに大変でももう「辞めたい」とは感じませんでした。無理だと思ったとき、諦めないで道を探してみる、きっと手を差し伸べてくださる方がいるはず。そして何より、踏み出してみれば自分の気持ちは簡単に切り替えられるものです。今は2人の子供を育てながらの研究生活で、悩んでいたあの頃よりも状況としてはむしろ過酷な毎日です。それでも限られた時間だから、研究がより楽しく感じられている気もしています。一種の飢餓感でしょうか。

今、男女共同参画への取り組みから制度や施設はかなり整い、「仕事と私事」を支えるハード面は確実に充実してきています。ただ一方で、実際に続けられるかどうかは、本人のモチベーションをどれだけ下げずにいられるかなのだと自身の経験から感じています。私は学士課程を奈良女子大学で過ごしたのですが、4年生のときに在籍した研究室では教授をはじめ先生方はすべて女性で、全員が子育てと仕事の両立をこなしておられました。もちろん楽な道ではなかったと思いますが、「私もいつかはこんな風になりたい」という憧れのような思いがありました。また、子育てから復帰してすぐにお世話になった神戸大学でも、PD受入研究者の先生は2人のお子さんを育てながら続けてこられた方で、公私ともに大変励ましていただきました。今、私が研究を続けていられるのは、こうした“身近なロールモデル”が多くいてくださったこともとても大きいと感じています。皆さんの周りにもいらっしゃるいませんか？ 私は「次は私の番！」になれるように、先輩方を目指して努力していきたいと思っています。